

科目名:ソフトウェア・ネットワーク演習1/素材・材料学演習1

担当教員：白石 晃一 先生

課題名：追加課題『四年後の社会を想像する』

『四年後の社会を想像する』

氏名：津田 海輝

学籍番号：11827025

はじめに

『二十世紀の豫言』と題された記事がある。1904年、20世紀初頭に、20世紀においてどのような進歩が起こるかの予想...つまりは『百年後の未来』の予想図として記された記事だ。これがまあ、よく当たっている。予言、つまりは想像、予想であるにも関わらず想像力豊かな作家の描く未来を題材とした文学に比べ的中率が高いのは、文学的な充実よりも真実を第一とするべき新聞記者による記事だったからか。

予言の内容はおおよそ環境と技術の予想について書かれているが、百年ならいざ知らず四年間で劇的な変化は、双方見込み薄と見ていいだろう。それに、内容が丸被りというのも些か独創性に欠ける。そこで、『何について予想するか』ではなく『なぜこのような予想になったのか』、要するに変化する物の選定方法ではなくどうしてこう変化すると判断したか、という判断方法を参考にさせて貰うこととする。

まず、分かり易いのは『欧米化』と『電力化』。この二つは言わば文明の象徴、纏めて『先進化』としても間違いではないだろう。これでレポート提出先がそこの発展途上国であったなら現代であっても四、五年先の予想など

“先進化する。 【完】 ”

で完結していたかもしれないが。字数制限を無視すれば。

京都造形芸術大学は先進国、しかもG7が一角『日本』の大体真ん中付近に建っている。別に『四年後の日本の未来を考える』ではないので課題のテーマには抵触しないだろうが。他人事のように先進化などと言ってられない。日本は『先進化』という事象において、既に原本側に位置している。ここは四年後の未来の一端として、発展の最先端を進む我らが祖国日本国の四年後について考えていこうと思う。

さて、預言においては先進化と同等、もしくはそれ以上に分かりやすい事象を元に預言を記していた。新聞社が「正確な預言（＝予測）」を書けた理由は、これにあると言っていいだろう。

傾向からの予測。傾いたグラフの延長線。情報を商売道具とする新聞社は、極めて性格なグラフが手元にあるような物だ。その中から伸びのいいグラフを選んで百年先までグイッと伸ばしてやれば良い。先進化ですら目に見えた『傾向』の一つとして、この項に含まれるかもしれない。

過剰な発展の予想が一部見られるのは、発展の最盛期の伸びが百年間とまではいかずとも長く続くと考えたのが、続いて欲しいと思ったのが原因だろうか。

基本的な未来予想の手法かもしれないが、情報化社会に生きるゆとり世代としては是非とも活用していきたい。とはいえ、情報化の大因であるインターネットの情報は玉石混交。新鮮かつ信憑性の高い情報源、例えば株でも見れば一目瞭然かもしれないが、あいにく筆者は株

価値動きをチャンネル変更の合図にして朝食を食べる派だ。ここで潔く株を始めるには元手が少しばかり寂しいので、こればかりは己のメディアリテラシーに任せるしかないだろう。

最後になるが、傾向からの予想の項において、記者の願望が予想を外す原因となったような事を書いたのが分かるだろうか。「続いて欲しいと思ったのが〜」のくだりだ。

スタートアップ概論において、度々ニーズ、不便さ（Pain）などがスタートアップの種になる事が多い、といった事を聞く。「こうなって欲しい」「こう変わって欲しい」という願いが、筆者がつけられた予言の判断要因の最後の一つだ。百年間の間に発展したものに限らず、発展の根幹はこの『needs』にあるとあって良いだろう。多分。

しかし残念ながら、記事を書いたのは記者、技術の発展に貢献する技術者ではない。予言において、記事において、最も「未実現」が多かったのが「こうなって欲しい」という願いをもとに描かれた未来予想図であった。

記事に書かれていたもの以外にも、民衆の願いは数しれずあつただろう。百年前の人々の願いなど、それこそ新聞記事でもない限りお目にかかれぬ。

今、「願いを届けたい」という第一の願いが、全ての人間に発信力として与えられようとしている。「願いを叶える」ための最前線に、スタートアップのスタートラインに私たちは今、立っている。

ただ、単位を貰わないことには前に進めないののでいい加減評価点を貰うべく本題に移ろうと思う。

序論

gOogleの検索欄に『最近外』と打つと、『最近外国人が多い』という検索候補が出てくる。

観光庁調査 [『年別 訪日外客数、出国日本人数の推移（1964年 - 2016年）』](#)のデータによると、訪日外客数は2009年と2011年の低下を最後に、加速度的な伸びを見せている。

鎖国が終わったのだと、感じられるようになった。交通の扉が、開かれたのだ。それも、黒船の次に何か来たのではない。日本への扉は、内側から開かれた。

本論

具体的な内容としては円安やビザ規制緩和など、様々な要因による結果だと予想されるが、わかりやすい要因は2020年開催予定の東京オリンピックだろう。

いわゆる五輪効果というものだ。[『日本銀行調査統計局 2020年東京オリンピックの経済効果』](#)によると、

“これまで「2020年に2,000万人」としてきた政府目標の前倒し達成がほぼ確実な情勢となっており、仮に2011年以降の増加ペースが今後も持続した場合には、2020年には3,300万人に達する。これは、前回2012年にオリンピックが開催された英国の外国人観光客数と概ね同水準であり、わが国の観光客誘致に向けた官民の取り組み次第では、訪日観光客のさらなる増加余地は十分に残されていると考えられる。”

との調査結果が出されている。

これは先ほど記した円安やビザ緩和などの影響の他に、海外での五輪効果も加味しての統計であり、同書においてはギリシャや中国の観光客増加の前例をもとに『訪日観光客のさらなる増加余地』の具体的な予測理由についても記されている。

この資料から読み取れることはただ一つ。外国人がさらに増えるのだ。京都では[外国人観光客向けのホテルが乱立](#)されているので心配だったのだが、前述の資料を見るにオリンピック閉会後の心配はあまり必要ないかも知れない。

京都だけではない。東日本の復興にはまだまだ課題が残されているが、建築関係に関しては

“住宅再建は着実に進捗、平成30年度までに概ね完了”

と[復興庁による資料](#)に明記されている。

平成30年7月豪雨の被害に関しては国管理道路の解放報告が立ち並び、熊本の復興の現状は帰省を機にこの目で見えてきた。ブルーシートが屋根を覆う光景も減り、寿命が寿命だからと再建を諦めていた高齢者の住宅もいつの間にかちゃっかり再建されているなど、「希望が見えてきた」印象を受けた。

経済的打撃を受けた行政と、手の空いてきた建築業者がある。建築業者に関しては、手が空いてきたとはいえ「昔に比べて」ではあるが。

ともかく、結論を言うとさらに観光系の整備、建築が増えるのではないかと考えられるのだ。それは長期的に、継続的に大量の外国人を呼び込むと言うことに他ならず、実際、『インバウンド政策』として建築だけでなく観光資源の発展、発掘に尽力している。

結論

まとめとしては、『四年後は外国人が更に増える』の一言で済むだろうか。とにかく増えるのだ。確実かつ大量に。

本レポートでは外国人労働者ではなく、観光客について触れた。理由としては、外国人労働者はある程度日本に適応してくれるのに対し、観光客は持てなさなすべき対象だからだ。英語力を鍛えるなど面倒な課題も多いが、観光客からは十分な見返りも得られるはずだ。敢えて直球な表現をするならば、この流れは金になる。

観光事業には、景観、市場開拓（商品開発）などにおいてx-techデザインコースで学んだ事が活かせる場面が多いだろう。なるほど確かに、この学科は最強かも知れない。観光事業には熱をあげられる気がしないが、『やりたいこと』を事業に出来るだけの能力を身に付けるため、この学科で四年後の卒業に向けて学べるだけのことを学んでいきたい。

...可能ならば四年後に卒業したいものだ。

観光庁調査 [『年別 訪日外客数、出国日本人数の推移（1964年 - 2016年）』](https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/marketingdata_outbound.pdf)
https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/marketingdata_outbound.pdf

[『日本銀行調査統計局 2020年東京オリンピックの経済効果』](https://www.boj.or.jp/research/brp/ron_2015/data/ron151228a.pdf)
https://www.boj.or.jp/research/brp/ron_2015/data/ron151228a.pdf

[ホテルが増えた](https://www.kyoto-np.co.jp/economy/article/20180310000075)
<https://www.kyoto-np.co.jp/economy/article/20180310000075>

[復興庁資料](http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat7/sub-cat7-2/20171106_iinkai-siryou1.pdf)
http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat7/sub-cat7-2/20171106_iinkai-siryou1.pdf